

ひとむれ

二〇一六年九月号

卷頭言

校長 仁原正幹

まず第一に、北海道家庭学校の子ども達はよく働きます。子ども達に寄り添い励ます大人達もよく働きます。七年五カ月前に望の岡分校が開設されてからも、週三回午後の学校日課の中で「作業班学習」が行われています。子ども達と家庭学校職員と望の岡分校教員が

三位一体の形で、「蔬菜班」、「園芸班」、「山林班」、「酪農班」、「校内管理班」の五班に分かれて、真似事でないホンモノの作業が、各作業班毎に力強く展開されています。

働く時間は「作業班学習」のほかにもあります。各寮毎に寮周辺の草刈りや除雪、花畑や野菜畑やハウスの管理、さらには、薪割りや風呂焚き、寮舎内の清掃、炊事の手伝いな

どを、それぞれ「朝作業」、「夕作業」として行っています。時には「全校作業」として、牧草の刈り取りや梱包の作業、広い敷地内全体の草刈り、禮拜堂や生活道路の清掃などの環境整備にも取り組んでいます。

子ども達はこうした忙しい作業日課に汗を流しながら、周囲の人のために役に立つ「よい働き」を体験して、充実感や達成感を味わい、自尊心を高めています。学習指導を下

支えする意味でも、作業指導が大きな成果を上げています。

毎日このように作業で忙しいために、家庭学校の子ども達には、スポーツに興じたり、寮内で戯れる時間はあまりありません。クラブ活動は夏場の土曜日の午前中のみの設定なので、常設の野球チームもなく、全国の児童自立支援施設が加盟する全日本少年野球連盟とは、長年の間会費納入のみのお付き合いで

したが、ついに昨年脱退させていただきました。作業指導に重きを置く北海道家庭学校としては、日々の暮らしの中で野球の練習をしている暇はなく、今後においても野球大会に参加することはまずないと判断したからです。

第二に、北海道家庭学校の子ども達はよく食べます。広い敷地内の作業や移動でよく身体を動かすので、お腹が空いてたくさん食べ

られるのだと思います。

量ばかりでなく、質的にもよく食べます。

家庭学校では特に食事と食育に力を入れており、季節毎の野菜や山菜、牛乳やバターなど、家庭学校の敷地内で収穫される新鮮な食材をふんだんに使った料理を毎日提供しています。栄養士が主催し、寮母等が参加する月例の「給食運営会議」によって毎月の献立表が作成され、給食棟でも各寮でもそれに基づいて

非常に手の込んだ調理が行われています。

まず、寮での食事ですが、平日と土曜日と祝日は朝晩の二食、日曜日は朝昼晩の三食が、それぞれの寮毎に準備され、各寮の食堂で食されます。寮母が調理し、炊事当番の児童がそれを手伝います。寮母は児童と一緒に手を動かしながら、また、対面式キッチンから食事風景を見守りながら、そして寮長は寮での全ての食事を児童とともにしながら、子ども

達一人一人と心を通わせます。

次に、給食棟での食事です。月曜日から土曜日までの昼食会と、月に一度の誕生会（夕食または昼食）が、子ども達と家庭学校職員と望の岡分校教員が一堂に会して、和気藹々の中で楽しく行われています。大人も子どもも所謂「同じ釜の飯を喰う」わけです。時にはお客様や法人役員にも参加していただいています。

子どもも達にとつては、作業班学習や朝作業・夕作業で自らが丹精して育てた野菜や果物です。減多に残したり、捨てたりしません。新鮮な野菜・果物の美味しさに驚き、入所前の食わず嫌いも自然に直るようです。ワラビやギョウジャニンニクやヤマブドウなどの自然の恵みも、何しろ自分たちが家庭学校の森で採って来たものですから、皆喜んで食べます。牛乳は毎朝当番の生徒が牛舎に向かい、

牛乳缶で寮まで運びます。どの生徒も新鮮で濃厚な味を堪能しているようです。

第三に、北海道家庭学校の子ども達はよく眠ります。早朝六時から日課が始まり、日中に作業や勉強、レクレーションなどで完全燃焼するので、每晚泉の水を薪で沸かすお風呂に入ると、九時半には眠りに就きます。全員早寝早起きです。

校祖留岡幸助が唱えた「能く働き、能く食

べ、能く眠る」という「三能主義」の精神が、創立以来百二年間、北海道家庭学校の確たる伝統としてしつかりと受け継がれてきています。

家庭学校にやって来る子ども達は、それまで往往にして昼夜逆転の生活をしてきています。ゲーム依存や偏食の酷い子どもも少なくありません。無気力、無関心、無感動、不活発な生活です。そのような不健康な生活が、

不登校、引きこもり、深夜徘徊、金銭持ち出し、家庭内暴力等の問題行動に繋がり、中には虞犯行為、触法行為に発展した子どももいます。

家庭学校ではテレビゲームは一切できません。スマホやケータイも持てず、パソコンも勉強以外には使えません。毎月の小遣いは金銭出納帳で管理され、現金は持てません。塀も柵もない開放処遇といえども敷地の外に出

ることは御法度です。電話、手紙などの通信相手も保護者など一部の人に限られます。単独行動はできず、年間行事予定表や日課表のとおり常に集団で動くことになっており、プライバシーも制約されます。これらは所謂「児童自立支援施設の枠のある生活」ということで、「育ち直し」には適した環境ですが、反面自主性や自律心が育たず、長く居ると自立が遅れてしまいます。

北海道家庭学校は「能く働き、能く食べ、能く眠る」健康的な生活の場ですが、あくまでも短期集中的な「育ち直し」の場であるべきだと、私は考えています。

生き辛さを抱える子ども達と過ごしていく中

石上館 寮長 水原学

寮長として生徒に関わり始めてはや三年が
経ちましたが、いまだ自身の未熟さをかみし
めています。

寮長として生徒と関わっていく中で、生
徒の生い立ちから来る愛着障害や、先天的に
持っている発達障害が絡み合い、その子独自

の生き辛さ、困り感となつて生徒自身を苛んでいるのを肌で感じ、なんとか少しでも生きやすい方法を伝えてやれないかと考える毎日です。伝える方法も子ども達によつて様々で、言葉で伝わる子、生活の中で褒められながら変わっていく子、周りとの関わりの中で間接的に変わっていく子等、十人十色であり、彼らにとつてどの方法が受け入れやすいかを考えながら伝えていますが、自分の伝えたい事

柄と、彼らが受け取っている事柄との間には
まだ大きな差がある事に悩んでいます。

ここの生活で学ぶことの多くは、退所し

てからの生活の下地になるものがほとんどで
すが、決してわかりやすいものばかりではあ
りません。当初、私は、彼らがここでの生活
の意味を見いだすためには、その時々の子ど
も達自身から出てくる「なぜ」に私がどれだ
け答えられるかだと気負っていました。しか

し、言葉で伝わらない子の多さに驚き、どうしたものかと悩んでしまいましたが、作業や生活をしていく中で「先生がこないだ言っていたことの意味がわかりました」と言い、子ども達が変わっていききました。言葉でないものの大切さを改めて感じたものです。

家庭学校という環境の中に答えはあふれており、それをどうやって見つけやすくしてあげられるかと、気持ちを切り替えたあたり

から私の気持ちを楽しになりました。全部を伝えられなくても、今までの生活に疑問を持てるような関わりをして、そこから子ども達もどんな答えを見つけるかを待てるようになってきました。見つけるのが難しい子には声掛けをしながら引っ張ってあげた子もいました。最後には自分なりの答えを見つけてくれました。それは大人が望んだ答えではないけれど、自分で見つけた答えだからこそ、大事にして

くれるものと思います。

彼らはここから出たら答えが簡単に手に入る情報社会の中に身を投じていきます。誰が出したかもわからない答えを平然と使いながら生きていくことになります。小学生のうちにまだ幼く、中学生のように多感なこの時期に、自分で感じ、自分で考え、自分なりの答えを出せる経験はとても貴重です。時には大人が噛み砕いて伝えてあげることも必要で

すが、最後まで自分の問題に取り組めることの幸せをこれからもいい形で伝えてあげられたらと思っています。

また、自分だけのケアで完結せず、より多くの選択肢を持ったケアを心がけていきたいと思います。

中卒クラスのこれから

常勤講師 木元勤

平成二八年一月号の「ひとむれ」で、中卒クラスに携わった五年間の大まかな報告と愚痴と目標に触れました。今回は、自分にとつて六年目の実際の授業の様子を通して学級運営の在り方を感じ取っていただければと思います。同時に将来に向けての方向性を探つて

みたいと思います。

平成二八年四月時点でのメンバーは、望の岡分校から持ち上がった二名と前年度から在籍していた二名の四名でスタートしました。

二学期が始まった現在（八月）は、進路が決まり退所した者と、職場実習のため本館にこない者（両名とも前年度からの在籍者）がいて、残り二名で始業式を迎えました。さらに原稿を書いている今、まさに新入生が加わり

三名となりました。平成二三年四月に九名で始まったときは、家庭学校職員のK先生が専従でついて下さり、二名体制でした。平成二四年度以降は、職員が責任者として統括し、教室内では自分が見るといふ形になりました。

クラスのメンバーの変動はこの学校の宿命です。人が替われば授業の内容や進め方も変わります。人数の多寡ではなく、学力、意欲

等の要素が絡んで授業が成立します。こちらの都合で言えば、手間のかかる子か、そうでない子かの違いです。メンバーに救われることもあれば、気持ち揺らぐばかりのときもあります。それがこの仕事の面白さだと思つて続けてきました。

先日、なにげない話をしていたときに出てきたのが、中卒クラスという名称についてでした。「何となく中途半端なイメージで……」

と生徒。「それが現実だから……」と私。平成二三年三月まで担当だったI寮長先生のときには、「中卒学級通信・くまげら」を発行、中卒生を「くまげら生」と呼んでいた時期もあつたようです。自分としては、名称についてはあまり考えたことがなく意外です。機会を見て再度話します。

「流汗悟道」が北海道家庭学校の原点と思つてきました。中卒生には、このクラスは家

庭学校のために働けるクラスだと伝えてい
ます。分校生は義務教育の授業があり、動けま
せん。必要なときに動けるのは中卒生なのだ
から、頼りにされているのだからと話します。
その仕事をきちんとやり遂げられない中卒生
は、考えられないと話します。時間割表には
作業のカリキュラムはありません。（昨年は
農作業の時間が週二時間ありました。）でも、
できるだけ体を動かして、工夫を身につけ、誰

かの役に立っているという充実感、達成感を
感じてもらう仕事をもちとさせたいと思っ
ています。

私と家庭学校

児童自立支援専門員池内伸明

「五ヶ月が経って」：家庭学校の生徒だとすれば、このようなタイトルで文章を飾るところでしようか。彼らからすれば、五ヶ月とは新入生期間が終わり、薪割りや草刈機を使用した作業など寮運営にとって大事な仕事を覚え、これから家庭学校での生活の本質を味

わって行くところですよ。そうした時期に、私は契約期間を終えて家庭学校を去ることになります。

家庭学校とは、実を言えばここに来るまでにいくつかの縁がありました。一度目は、私が大学院を卒業する際に、師事していた教授から就職先として紹介していただいていたこと。二度目は、一昨年に現在寮長をされている藤原先生に誘っていただき、日曜礼拝に参

加させていたただいたこと。

そして三度目は、今年の三月に藤原先生ご夫妻の引越しのお手伝いをさせていたただいたことでした。この時、私は諸般の事情から一、二ヶ月間ほどの短期間の仕事を探していただきました。三度の縁があつたということもあり、家庭学校で何かお手伝い出来るような仕事がないか、藤原先生、校長先生に尋ねてみたところ、結果として藤原寮母先生の産休代理の

職員としてももう少し長い間こちらで仕事をさせていただくことになったのでした。

職員として家庭学校に入ってから、怒涛の日々が続きました。自分の生活が立ちいかない中で、まず寮周りが始まりました。早朝に始まり夕方まで毎日続く、体を動かす作業と学校の授業。子どもたちとの関わりよりも、こうした日課にまず自分が慣れていくことに

精一杯という状態で、薪割り、風呂焚き、ビニールハウス作り作業など、これまで経験したことの無い内容がさらに私の戸惑いに拍車をかけました。

しかし、それを助けてくれたのは子どもたちでした。最初は「先生なのにこんなことも出来ないのか」、そう言われることを予想していました。しかし、期待に反してそうしたことを言う子どもは一人もおらず、むしろ丁

寧に一つ一つの作業手順を教えにくれたのでした。また、彼らが自分の得意な作業を集中して行う時、大人も顔負けな働きを見せてくれました。

もちろん、子どもたちの働きや生活態度は、家庭学校、望の岡分校の先生方の並々ならぬご苦労があつての結果であるということとは言うまでもありません。家庭学校での生活を体験させていただいで、私も児童指導と自然の

中での生活の困難さの一端を実感することが出来ました。

家庭学校での生活は、まさに生活自体によって自分が陶冶されている感覚でした。こうした経験を胸に、今後私がどこにいるか定かではありませんが、どこにいても家庭学校の生活を懐かしく思い出し、子どもたちの無事を祈っていると思います。

